

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | 「ている」の意味と動詞の分類：動作・作用を表わす動詞について  |
| Author(s)     | 大倉, 美和子   |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 39 p.281-p.295   |
| Issue Date    | 1977-03-15  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80675">https://hdl.handle.net/11094/80675</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「ている」の意味と動詞の分類

—— 動作・作用を表わす動詞について ——

大 倉 美 和 子

## Aspectual Features of Verbs and the Meanings of the “-te iru” Form

— Verbs Expressing Action —

Miwako OKURA

In this paper, we will examine what kind of inherent aspectual features of verbs combine with one of the different uses of the “-te iru” form, an auxiliary which is said to express aspect: (1) “continuous” state and (2) “resultant” state.

Each verb, considered from the standpoint of the ‘perfective’—‘imperfective’ distinction, has inherently one or both of these aspectual features. A verb’s aspectual feature combines with a particular use of the “-te iru” form as follows. A ‘durative-perfective’ verb combines with “-te iru” to express the “resultant state”, “experience or confirmation” or “repetition”; a ‘durative-imperfective’ verb combines with “-te iru” to express “continuous state”; and an ‘instantaneous-perfective’ verb combines with “-te iru” to express “resultant state”.

Further, adverbial modifiers serve to make clear the meaning or the interpretation of “-te iru”

### はじめに

「ている」をめぐる問題の一つに、

あの人は今小説を書いている。

あの人はたくさん小説を書いている。

に用いられた「書いている」の意味がどちらがうか、そのちがいはどこから来るかというのがある。かつて金田一氏は、この点に触れてつぎのように述べた。まず、同氏の論文(1954)では、

「書写中の意味で『書いている』というときは、『書く』を継続動詞として用いているのであるが、『著述がある』の意味で、

あの人はたくさんの小説を書いている。

という場合には、『書く』は、継続動詞としての意味を無視して使っているようなものである。

このような場合『書く』は臨時に（傍点筆者）瞬間動詞と用いられていると言ってよいと思う。」

<sup>(1)</sup>と述べ、同氏論文（1957）では、「完了体」「未完了体」という対概念を用いて、

原稿ヲ書イテイル

が、「もし、『現在執筆中である』という意味の時は、『執筆』という行動を継続的な行動と見て  
いるわけで、この『書く』は未完了的な用法、

アノ人ハ（スデニ）タクサン小説ヲ書イテイル

の『書く』は、『著述』という行動を継続的な行動と見ないで表現しているのだから、完了体」  
と考え、日本語の動詞は、一つの動詞が同時に二つの体の用法を内包していることを指摘した。<sup>(2)</sup>

金田一氏によるこれらの解釈は、動詞の性質を探る上で大きな示唆を与えるものであるが、氏は、  
は、どういう条件下で一つの動詞のどちらの性質が発現するかについては、話者の動作のありよう  
に対する見方のちがいということを指摘したのみで、詳しくは言及しなかった。

本稿では、「ている」の持ついくつかの意味のうち、とくにこの点に注目して、いかなる動詞  
が、どのような条件下で「進行」「結果の状態」を表わすかということを考えてみる。その際、  
動詞自体が持つアスペクト的意味と「ている」という補助形式の表わすアスペクトとの結合関係  
を明らかにすることに努めた。「ている」と結合して「進行」「結果の状態」を表わす動詞に焦点を  
あてているので、ここでとりあげる動詞は「動作・作用を表わす動詞」にしぼっている。

## 1. 「ている」研究のながれ

### 1-1 「ている」をめぐる研究の二つの立場

従来から「ている」についての多くの研究がなされてきているので、はじめに、その研究の跡  
をたどってみる。私の見るところ、「ている」研究の態度は二つに大別できるようだ。

一つは、「ている」に前置する動詞の種類に着目して「ている」がになう意味を探る方向で、  
動詞の種類（瞬間、継続など）のちがいが、それと結合する「ている」の表わすアスペクト  
（態）を異なるものにすると見る立場である。佐久間氏が「継続態」「存在態」に区分したものを  
一歩進めて、金田一氏は「既然態」「進行態（反覆進行態を含む）」「単純状態態」に分類した。  
金田一氏の分類以後、後述するように、氏の研究成果をふまえそれを発展させる方向での研究が  
多くなされてきた。それに伴って、「ている」の意味・用法も詳しく論じられるようになった。  
こうした、「ている」に前置する動詞に着目する立場を一つの方向とすると、他方、動詞「いる」  
に着目して「ている」の意味を明らかにするという方向がある。この場合、その大方は、「てあ  
る」との対比で「ている」の姿を把えようとしている。この立場は、金田一氏などがアスペクト  
の問題として「ている」を扱っているのに対し、自動詞、他動詞などの分類に重点を置いている  
点で、ボイス的側面を追求していると言える。こうした中で国広氏は、基本的には後者の立場に  
立ちつつ、アスペクトの側面をも追求する態度<sup>(3)</sup>をとっている。氏は、「イル」の意義素を

明らかにすることを目的にした作業過程において「テイル」の意味の記述を行なっている。氏によれば「テイル」は「テ+イル」で、動詞の「実現形」『タ』の接続形「テ」<sup>(3)</sup>と「イル」<sup>(4)</sup>の連語と考えられている。そして「テイル」の意味は、＜＜生物・無生物を問わず、ある行為者が自発的（氏の注によると spontaneously の意の自発的）にある行為の継続中・状態にある＞＞と記述される。「テアル」の意味は、＜＜生物の行為の結果が存在することが客観的に認められる＞＞<sup>(4)</sup>と記述され、ここから「イル」「アル」の意義素が抽出されているが、「イル」については<sup>(5)</sup>つぎのようにまとめられている。

イル：＜＜ある主体の自発性に基づく存在を不定人称者が継続相（下線筆者）において把えていることを表わす＞＞<sup>(6)</sup>

国広氏の場合には、金田一氏の態度への批判が述べられている。「既然態」「進行態」という「一見態の相違と見られるものは実は動詞の瞬間、継続の相違の反映で、態は一つ」<sup>(7)</sup>なのであり、「ている」は「継続相」を表わすという説明でつきるということで処理されている。

以上のような、異なった二つの研究立場からする「ている」分析、つまり、「動詞+ている」と見るか、「動詞+て+いる」と見るかは、そのアプローチのちがいがそのまま結論に持ちこされてくる。金田一氏が「ている」自体は「状態相のアスペクト」を表わすとし、下位区分としてその中に「既然態」「進行態」「単純状態態」の態を位置づけるのに対し、国広氏は、現象的には「ている」は動詞の種類に応じて異なる意味を表現してはいても、実際の態は一つという立場に貫かれている。しかし、氏自身のつぎのような言葉は、やはり、アスペクトによる下位区分の必要性を示唆してはいないだろうか

『書イテイル』が完了と進行の2つを表わし得るのは、『書ク』という動作の把握の仕方によると考えられる。継続動作として把えた場合には進行の意味になり、動作全体を1つにまとめて把えた場合には完了の意味になる。<sup>(8)</sup>

「完了」といい「進行」といい、どちらもアスペクト—ある動作が実現されるにあたり、その過程のどの様相、どの段階を把えて問題にしているかを示す文法的な区別—に他ならず、これを表現する文法的手段として「ている」を用いているのであるから、国広氏が、「ている」の表わす態は一つと述べてはいても、その中に「完了」「進行」という二つのアスペクトが位置づけられることになる。

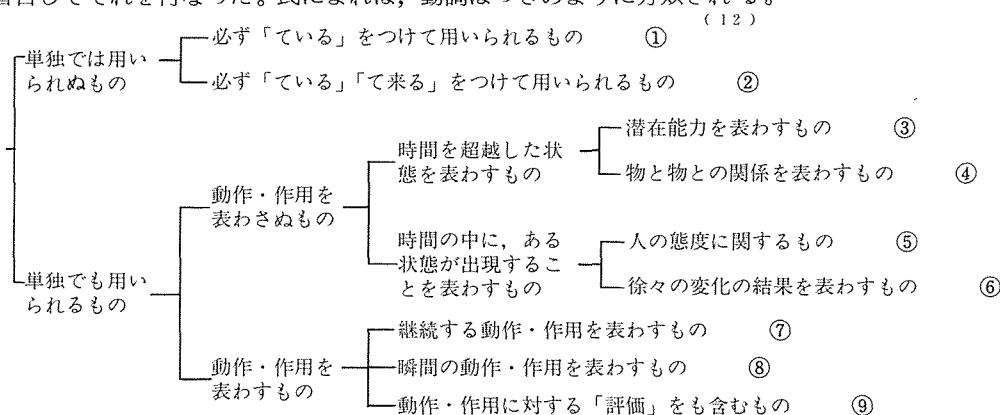
こうして結局、「ている」の意味を明らかにするということは、「ている」の表わすアスペクトの内容を探ることにつながっていく。

## 1-2 「ている」の意味決定要因

「ている」が、「ていく」や「てしまう」など動作、作用の実現の仕方表現する語法と異なり、話題の対象となるもののある状態を表現することは、大方の認めるところである。また、い<sup>(9)</sup>かなる状態を表現するかという点に関しても、基本的に、ある動作の進行継続中の状態を表わす

用法と、ある動作の実現した結果の状態を表わす用法とを持っているということも一般に認められている。問題は、二つの異なるアスペクトを同一形態の「ている」が表わしうることから来るのだが、それは、「はじめに」で述べたように、いかなる場合に「進行」の状態を表わし、いかなる場合に、「結果の状態」を表わすかというところにある。従来は、「継続動詞＋ている」が「進行」を、「瞬間動詞＋ている」が「結果の状態」を表わすとされてきたのであるが、「書いている」の例にみられるような、二義性に関わる上記の問いに答えるためには、「ている」の文法的意味（＝アスペクトの意味）と、それに前置する動詞そのもののアスペクトの意味と語彙の意味、そして、これらと共起しうる修飾語などが絡みあって「ている」表現が用いられていることに留意し、これらの点を念頭におきつつ、その結合のありさまを観察しなければならない。この点で、藤井氏の『動詞＋ている』の意味<sup>(10)</sup>と吉川氏の「現代日本語動詞のアスペクトの研究」<sup>(11)</sup>は、新しい多くの事実を示してくれている。

藤井氏の論文では、まず、動詞が詳しく分類、整理されている。氏の分類は、金田一氏のものを踏襲し、整理する中から明らかにされてきたものである。氏は、動詞そのものの語彙の意味に着目してそれを行なった。氏によれば、動詞はつぎのように分類される。



さらに、藤井氏は、継続動詞（⑦）と瞬間動詞（⑧）の中に、「あとにある結果をもたらすような動作・作用を表わす動詞」があることを指摘し、この種の動詞を「結果動詞」と名づけた。<sup>(13)</sup>この「結果動詞」の発見は、「ている」の用法分析に大きな意味を持っている。氏はこの発見によって、まず、(1)継続動詞であろうと瞬間動詞であろうと、結果動詞のみが、「ている」と共にきて、実現された動作の「結果の状態」を表わし、(2)動作・作用を表わす動詞が「ている」と来て、「過去」を意味する修飾語を伴う場合には、「経験」を表わす、ということを明らかにした。金田一氏が挙げた文例、

あの人はずでにたくさんの小説を書いている。

は、結果動詞ではない「書く」が、修飾語「ずでに」と来た例であるから、これは、「経験」を表わすというふうに考え、金田一氏のいう「既然態」から「経験」の意味を取り出して区別した。また、

今は／現在は結婚している。(結果の状態)

彼は1960年に結婚している。(経験)

のように、同じ瞬間動詞であり、結果動詞である「結婚する」という一つの動詞が、「結果の状態」と「経験」との意味になるのは、「ている」と共起する修飾語によるものとした。さらに、彼らはすでに知り合っている。

の「知り合う」のように、「ている」と来ても「結果の状態」を表わさない(したがって、「経験」か「反覆」しか表わさない)瞬間動詞の一群があることも明らかにした。

吉川氏は、藤井氏の成果を踏まえ、さらにそれを発展させた。氏は、その論文「現代日本語動詞のアスペクトの研究」の中で、「この研究では、主として、各形式(アスペクトを表わす言語表現形式のこと一筆者注)の持つ文法的な意味と、その意味を実現する動詞の性格を検討すること、及びそれによって動詞を分類することに重点をおいた。」と述べているように、「て」を含む言語形式のうちの、アスペクトを表わすと考えられているいくつかの形式を詳しく調べて、動詞分類に新しい観点を提起した。ここで、動詞のアスペクトの意味と「ている」の関係を明らかにするという、本稿で問題にしている点に限って、氏が観察の結果得た成果を挙げると、次の二つがある。

1. 動詞の分類において、継続↔瞬間という分類とクロスする、結果↔非結果という分類をより明確に提起した。
2. 「継続動詞と瞬間動詞の区別は絶対的なものでなく、構文的または文脈的に一定の条件が充たされた場合には、継続動詞が瞬間動詞として働く(あるいはその逆がおこる)ことを明らかにし、どういう条件でそれがおこるかを追求した。

1については、上で見たように、藤井氏がすでに発見していたものだが、藤井氏の場合、動作・作用を表わす動詞全体が『結果動詞』と『結果動詞でないもの』に二分される。」というだけで、語彙的にどういう特徴を持つ動詞が結果動詞として現われるかという点は明らかにしなかった。この点を、吉川氏は、高橋氏の観察をも踏まえて追求し、より整理された概念として提出した。氏による「結果動詞」「非結果動詞」の定義はつぎのとおりである。

結果動詞……「ぬれる、こわれる」のように、動作・作用の行なわれた結果、主体の状態が変わることをあらわす動詞

非結果動詞……「読む、考える」のように動作・作用の行なわれた後も主体の状態が変わらないことをあらわすような動詞

次表は、上記を氏自身がまとめて図示したものである。

|         | 結 果 動 詞  | 非 結 果 動 詞     |
|---------|----------|---------------|
| 継 続 動 詞 | 着る、かぶる   | 遊ぶ、降る、うらやましがる |
| 瞬 間 動 詞 | 出る、パンクする | 目撃する          |

2については、先述したような金田一氏の解釈や、1-1 で見た国広氏の解釈などがある。藤井

氏は、「ている」と副詞との共起関係で「経験」と「結果の状態」を区別した。したがって、

{ 月は今出ている。 (結果の状態)  
 月は六時に出ている。 (経験)

の二文の差には注目したが、

{ 今、水が出ている。  
 今、月が出ている。

の差については触れなかった。 (「出る」が継続動詞として分類されるのか瞬間動詞として分類されるのか、氏自身の記述がない。)

これに対して吉川氏はつぎのように述べている。

「継続動詞と瞬間動詞の区別は絶対的なものではない。

例えば、動詞「でる」は、

うつくしいにじが西の山に出ています。

では瞬間動詞として働くが、

糸のように細く出ている水は、十五分間でやく一リットルになりました。

では、継続動詞として働いている。<sup>(20)</sup>

しかし、「でる」が継続動詞か瞬間動詞かについての氏の見解には混乱がある。上記のような記述があり、氏自身が作成した先述の分類表でも、「でる」は瞬間動詞の結果動詞の欄に位置づけられているが、同じ論文の別の箇所では、

糸のように細く出ている水は、十五分間でやく一リットルになりました。

ばたばたと落ちている水は、十分間でやく一デシリットルになりました。

の例を挙げて、つぎのように説明し、「出る」が継続動詞であると考えられている。

『出ている』『落ちている』はふつう『結果の状態』をあらわす (したがって、氏の定義では「結果動詞」である) が、上の例では『継続』をあらわす。『出る』の場合「『糸のように細く』という句が水の出方をあらわしているからである。」<sup>(21)</sup>「このように『出る、落ちる』などは継続動詞であり、かつ結果動詞であるが、実際の文においては、あるいは継続動詞として働き、あるいは結果動詞として働くのである。もっとも、この『出る』や『落ちる』の場合には、何ら特別な条件がなければ結果動詞として働く。つまり、結果動詞性の方が継続動詞性より強いのである。」<sup>(22)</sup>

動詞「出る」に関する私の見解は後で述べるとして、私なりに吉川氏の考え方を解釈すると、先の「継続動詞と瞬間動詞の区別は絶対的なものではない」の文中の「瞬間動詞」は「結果動詞」の同義語として用いられているといえるようだ。この点を、氏自身はつぎのように述べている。

「継続動詞↔瞬間動詞の別は、結果動詞↔非結果動詞の別とは異なる分類基準であるにもかかわらず、実際には継続動詞と結果動詞とが対立しているように見える。本当の瞬間動詞はごく少ないのであって、多くの継続動詞は非結果動詞の特徴をあわせ持ち、多くの結果動詞は瞬間動詞

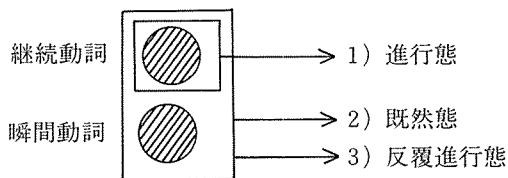
の特徴をあわせ持っているのである。継続動詞と結果動詞との特徴をあわせ持つものは、実際の文において、そのどちらかとしてあらわれる。」

吉川氏の分類に上のような混乱が見られるとはいえ、氏によって、一つの動詞が上述のような二つの性質をあわせ持つということ、いずれか一方の性質が、「ている」および動詞と共に用いられる修飾語の働きによって、表面に浮かびあがってくるということが明らかにされた。氏によれば、「着る」などは、継続動詞性と結果動詞性が同程度に強い<sup>(23)</sup>ため、「着ている」だけでは、どちらの性質を発揮しているか分らないと述べている。「ている」の意味決定要因として、構文や文脈が大きい位置を占めていると同時に、それらが、動詞の性格を知る上でも大きな働きをすること、そして、動詞のある一つの性質が「ている」の用法のいずれかと結合するということ<sup>(24)</sup>がこうして把握された。「ている」の意味のちがいによって動詞の分類を試みた金田一氏の立場がそこに貫かれていると同時に、氏以後の研究の成果がうかがえる。

### 1-3 動詞の分類と「ている」

「ている」の意味を探ることは、各々の「ている」に前置する動詞の性質を詳しく調べることと不可分であることを今まで見てきたが、ここで、どのような動詞と「ている」のどの用法とが結合するか、上記三氏の見解をまとめてみよう。

金田一氏の場合を（動作・作用を表わす動詞に限って—以下の二人の場合も同様）図示すると、つぎのようになる。



#### (1)の文例

彼は本を読んでいる。

彼は小説を書いている。

#### (2)の文例

彼は結婚している。

戸があいている。

雪が三寸ぐらいつもっている。

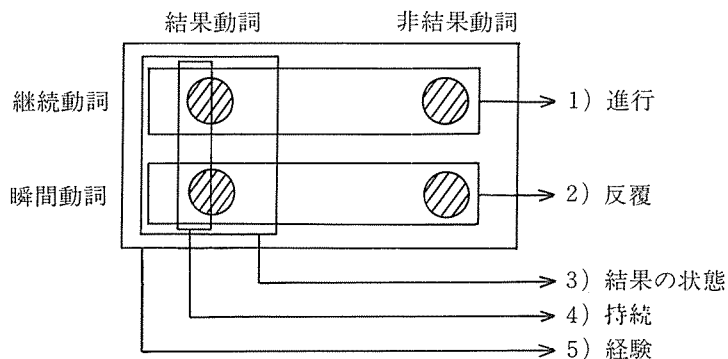
#### (3)の文例

この頃は栄養失調で人がどんどん死んでいる。

彼は毎朝バイブルを読んでいる。



藤井氏の場合



(1)の動詞例 (氏の動詞分類表の⑦全部)

読む, 書く, 働く, 歌う, 聞く

(2)の例 (同上⑧全部)

死ぬ, 知り合う, 結婚する

(どんどん人が死んでいる。)

(3)の例 (同上⑦⑧の結果動詞全部, ⑥全部)

着る, 乗る, 行く, 来る, 散る, 落ちる

(地面に花が散っている)

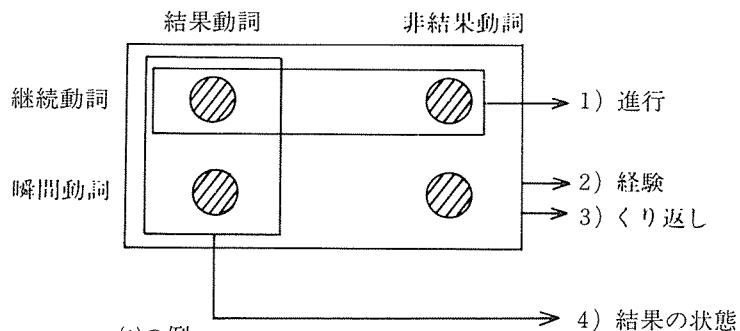
(4)の例 (⑦⑧の結果動詞の一部, ①の一部)

乗る, 着る, (電灯が) つく, 立つ, すわる, じっとする, 黙る

(5)の例 (⑦⑧⑨の全部)

書く, 読む, 着る, 乗る, 知り合う, 目撃する, 早起きする。

吉川氏の場合



(1)の例

読む, 流れる, 遊ぶ, 思う

(2)の例

育つ、作る、降る、絶える、卒業する

(3)の例

見る、通る、言う、起こる、死ぬ

(4)の例

着る、かぶる、かくす、パンクする、出る

## 2. 意味解釈のレベルから発話のレベルへ

### 2-1 ‘imperfective’ と ‘perfective’ と

1で、動作・作用を表わす動詞が「ている」と結合した際の「ている」の意味決定の要因について整理した結果、「ている」形式の意味分析にあたっては文脈、構文上のレベルを考慮すべきこと、動詞そのものについて継続⇔瞬間という分類の仕方だけでなく、その性質をさらに詳しく考慮することの必要性があらためて確認された。それらを重視する立場から、「結果動詞」の発見や定義づけが行なわれたこと、「ている」の意味に「経験」がつけ加えられたことは、大きな成果といえる。その結果、

彼は今小説を書いている（進行）

彼はたくさん小説を書いている（経験）

のような場合の「ている」の意味のちがいが明らかになった。また、

彼は現在結婚している（結果の状態）

彼は1960年に結婚している（経験）

に見られるように、共起する修飾語のちがいが「ている」の意味を異なったものにすることも明らかにされた。かつて金田一氏が動詞の性質について、「完了体」「未完了体」の二つの対立する用法を同時にあわせもつとしたことや、臨時的に継続動詞も瞬間動詞として用いられると考えたこと、あるいは、国広氏が、一つの動作を継続動詞として把握するか、一まとまりの動作として把握するかのちがいが「ている」の意味を異なったものにと考えたのをより客観的なメルクマールで、つまり、主体の状態変化をもたらす動詞か否か、共起する修飾語の種類はどうかなどで「ている」の意味を明確にできる、ということを明らかにした点で大きな意味をもっている。

ところで、こうした成果は「ている」の意味解釈のレベルの問題である。意味解釈のレベルと、発話者が、ある事象を言語表現化する際の意味選択（発話者がある主体の現在の状態について述べようとする時、どのようにして、どの段階で、「ている」の意味の一つが選択されるのか）のレベルは同一であろうか。金田一氏や国広氏は、発話時の意味選択のレベルをも念頭におきつつ上記のような一定の解釈を示したのではなかろうか。この点を考えると、「結果動詞」「非結果動詞」という分類で果して十分であろうかという疑問が残る。そこでもう一度、吉川氏らの手順を眺めてみよう。そこでは、つぎのような手順が述べられている。

- (1) 結果動詞か否かの判断
- (2) 継続動詞か瞬間動詞かの区別
- (3) 「ている」の意味決定

これを、吉川氏の文例

糸のように細く出ている水は、十五分でやく 1 リットルになりました。

で見えてみると

(1)は、文脈全体が「結果の状態」を表わしているかどうかが基準になる。継続↔瞬間という区別は一つの動詞にとって絶対的な性質を表わすものでないから、まず(1)が問題にされる。この文例では「結果の状態」を表わさないから「出る」は非結果動詞である。つぎに、「ている」に前置する動詞を修飾する語によって、継続動詞か瞬間動詞かの区別を行なう。ここでは、「糸のように細く」がこの場合の修飾語である。こうして、1-3 で図示した吉川氏の「ている」の意味のうち、上の文の「出ている」に該当する意味として、継続動詞の非結果動詞に許されている「進行」か「経験」か「くり返し」か三つの意味が残される。ここで再度文全体の修飾語に注目して、<sup>レ</sup>過去<sup>ニ</sup>を表わす修飾語及び<sup>レ</sup>反覆<sup>ニ</sup>を表わす修飾語のないところから、「進行」の意味が最後に残るという手順である。これらは、意味解釈をする際の手順である。

これに対し、発話のレベルでは、つぎのような手順となる。

- (1)核になる文の設定
- (2)テンス・アスペクトの設定
- (3)話者の心態

糸のように細く水が出ている……①

の場合、まず、「(糸のように細く)水が出る」という基本文が設定される。動作・作用を表わす動詞は、言い切りの形で<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>形が来ると、ふつうその動作・作用が未来に実現されることを表わすので、発話者が現在の状態を表現したい時には、(この意味で「ている」はテンス的側面を持っているが、これはその中に含まれる<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>による)「ている」を選択する。この場合の「出ている」の「ている」は、必然的に「進行」を表わす「ている」である。

また、(今)月が出ている。……②

の場合には、まず、「月が出る」の基本文が設定され、上と同じように、現在の状態を表わすために「ている」がこれに結合されるが、この文での「ている」は必然的に「結果の状態」を表わす「ている」である。なぜ、ここで「必然的に」と述べたかと言うと、動詞「出る」自体のもつアスペクト的な意味が、それぞれの「ている」との結合しか許さないからだとは私は考えるからである。「水が出る」の「出る」(①)と「月が出る」の「出る」(②)は、そのアスペクトの意味において異なった性質を持つ。①の「出る」は、「非完結 (‘imperfective’)」の性質を持ち、②の「出る」は「完結 (‘perfective’)」の意味を動詞

自体が持っている。動詞の持つ「非完結」の性質は、「ている」の「進行」の意味とのみ結合し、「完結」の性質は、「結果の状態」とのみ結合する。

「非完結」の性質とは、動作・作用が完結しなくても、その動作・作用実現の最初の瞬間から動詞の意味を完全に表わしうる性質であり、「完結」の性質とは、その動作・作用が完結してはじめてその動詞の意味がみたまされる、そういう性質である。①の「出る」は水が出はじめた瞬間からその意味を充たすが、②の「出る」は月が出おわらないとその意味が充たされない。「完結」の性質は、瞬間動詞であることと一致する。(たとえば、「電灯がつく」の「つく」、「死ぬ」「始まる」などそれは、きわめて短い時間帯の内に、あるいはある瞬間に、その動作が終ってしまうと見なし得る場合が多いからである。ところが、一方、継続動詞は、基本的には「非完結」動詞であるが、「完結動詞」になる性質をすべて備えている。それは、話者の知識に支えられて発現する性質である。たとえば、

彼は小説を書いている。

という文が「進行」と「経験」の二義性を持つということがそれを物語る。「進行」の場合には、その「小説」がまだ完成していない(そしてそのことを話者は知っている)。したがって、「小説を書く」という動作は終ってはいないが、「書く」という動作の意味は書きはじめの時点から実現されている。「経験」を表わす場合には、その「小説」がすでに完成していなければ(そしてそのことを話者が前提として知識に持っていなければ)この文は不可能なのであり、「小説を書く」という動作の完結があってはじめて「書く」の意味が実現されるのである。このように、「書く」そのものだけを見ても、完結・非完結のどちらの性質が現われているのかは分からない。「小説」に対する知識がなくては、「ている」の意味の識別も不可能である。そのために、<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup> や <sup>ニ</sup>25才の時に<sup>ニ</sup> など、いずれかの「ている」としか共起しない修飾語を用いて、聞き手の意味解釈を助けることが必要になる。この修飾語の挿入は、発話のレベルでは、(1)の核になる文の設定の段階で行なわれていると考えられる。

彼+小説を書く+25才の時に

というような基本文があり、これにテンス(あるいはテンス・アスペクト)を表わす <sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup> が加えられて

彼は25才の時に小説を書いた。

の文が設定される。現在の状態を現わすために「ている」が結合されるが、この時の「現在」は、テンス・アスペクト的な観点からというより、話者の心態とでも言うべきものが大きく作用しているようだ。話題になっているものの状態の変化が話者によってどう把握されているかを表わす「進行」や「結果の状態」に比べて、ムード・アスペクト的な観点で、「経験(「おもしろい」もしくは「確認」のような用語の方がむしろ適切と思われる)」を表わす「ている」が選択され、こうして、

彼は(すでに)25才の時に小説を書いている。

の文が出来上がる。

以上に、発話のレベルにを考慮を払いつつ「完結」「非完結」という二つの区分を見てみたが、「結果動詞」「非結果動詞」の基準では考察の対象にされなかった「知る」「おぼえる」などについても適用できる区分であることをつぎに述べよう。

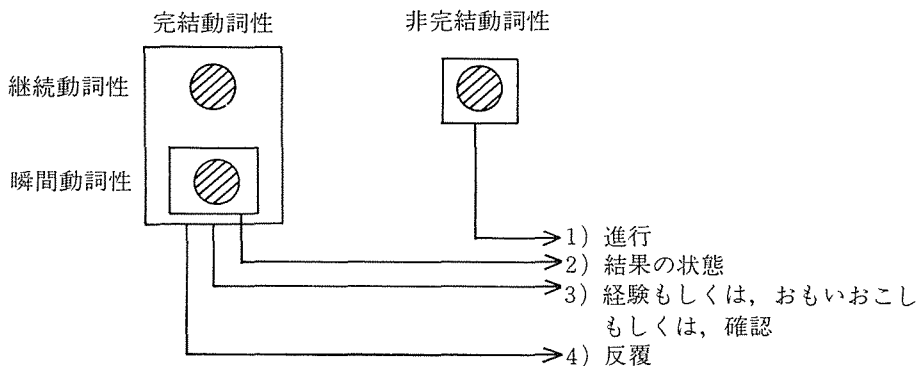
「結果動詞」というのは、すでに見たように、「あとにある結果をもたらすような動作・作用を表わす動詞」(藤井氏)、もしくは「主体の状態の変化」をもたらす動詞(吉川氏)というように述べられている。藤井氏の場合は「知る」を瞬間動詞のうちの結果動詞として位置づけられているから、「おぼえる」も同様に位置づけられるのであろうが、吉川氏の場合、「主体の状態の変化」は「着る」「行く」「出る」「すわる」「立つ」などのように可視的な変化に限られているようだ。人間の精神活動を表わす動詞でも「知る」や「おぼえる」などは、主体の状態変化をもたらすと考えられているかどうかさだかではない。しかし、動作・作用を表わす動詞はいずれも可視的であれ不可視的であれ、何らかのかたちで主体の状態変化を表わすことがその本質的な機能ではなかろうか。動詞のアスペクト的意味に注目して「完結」「非完結」という基準で動作・作用をながめると、そういう疑問も残らない。上記の動詞はそれぞれ

知る → 瞬間・完結動詞

おぼえる → 継続・非完結かつ完結動詞

と区分することが出来、どの意味の「ている」と結合するかがはっきりする。

以上の、継続↔瞬間、完結↔非完結という動詞そのものの持つアスペクト的意味が「ている」と結合した際の「ている」の意味の関わりを図示すると、



のようになる。「ている」が反覆を表わす場合を完結動詞に限ったのは、同一主体によるくり返し動作でも、別々の主体によるくり返し動作でも、一回ごとあるいは一つ一つの完結した動作がくり返されるものだからである。

## 2-2 動詞の語彙的意味

2-1 では、動詞自身が持つアスペクトの意味に触れたが、前に「ている」の意味決定要因として、動詞の語彙の意味が重要だと述べた。つぎに、この点について述べよう。

2-1 の中で、「水が出る」の「出る」(①)と「月が出る」(②)の「出る」とは異なるアスペクト的性質を持つと述べた。このアスペクトの意味のちがいをもたらすのが、それぞれの語彙の意味である。「出る」のような基本的な動詞には、共起する語の巾が広い。

水が出る

月が出る

(だれかが) 部屋を出る

ある記事が新聞に出る

のように様々に用いられる。こういう場合には、「出る」の動作主体になりうるものの種類・性質について調べねばならない。つまり「水」のように一つの個としてのまとまりをもつものとして把え得ないもの場合は、継続・非完結動詞としての性質を表わし、「月」「人」「記事」のように、一つのまとまりをもつ個として把え得る場合には、瞬間・完結動詞としての性質を表わす。「着る」についても同じように考える必要がある。

a. 彼女は今二階で着物を着ている。

b. 彼女は今日は水色の服を着ている。

a. では、着物を着る過程に要する様々な作業を意味しており、b では、服を身につけることを意味している。同じ動詞でありながら共起する語の性格によって継続動詞か瞬間動詞かの異なる二つの要素を持つ動詞があることは事実である。したがって、その区別をするには、動詞の語彙の意味特徴を考察しなければならない。動詞の意味特徴を記述したものとして『動詞の意味・用法の記述的研究』(宮島達夫、秀英出版、1972)があり、いろんな観点から把えた動詞の意味特徴が記述されているが、アスペクトの意味を含んだ記述は見られない。この可能性の追求は今後の課題ではなかろうか。これは、意義素分析の立場に通じるが、語の意味の記述に際しては、どの側面からその語を見るかが重要なポイントとなろう。共起しうる語の性質などが明らかにされれば、アスペクトを表わす諸形式との結合関係もさらに明確になると思われる。

### 結びにかえて

以上に見た動詞と「ている」は、動作・作用を表わす動詞と、それに結合する「ている」のみである。いわゆる「単純状態態」については触れることができなかった。この「単純状態態」は「結果の状態」を表わす「ている」に近い性質をもつ半面、述べられている主体の属性を表わす場合が多いという点で、実現された動作・作用の結果の状態とは異なる側面をもつ。主体の状態の変化を表わす「ている」とは一応切り離して考えられ、むしろ、属性を表わすという点で形容詞に近い。また、「富んでいる」「そびえている」「ありふれている」

「似ている」など、話者が何んらかの基準に照らしあわせて、話題となる主体の属性を述べている点でも、「大きい」「小さい」「長い」「短い」のように、話者の主観的な基準に照らしあわせて用いられる形容詞群と似たところがある。『形容詞の意味・用法の記述的研究』に、「形容詞には、ある基準に照らしての相対的な判断、評価を表わすという性格が強い語が多い」と述べられているが、形容詞の一つの特性を言いあてている。吉川氏も「結果の状態」<sup>(26)</sup>と「単なる状態」<sup>(27)</sup>を区別するのは「一時的変化」か「恒常的变化」かというあたりにあるようにだと指摘されている。この点を掘り下げてゆくことによって、「単なる状態」「結果の状態」を表わす「ている」に結合する動詞の性格がまたあらたに明らかにされるにちがいない。動作・作用を表わす動詞の中にも、たとえば「曲る」「ふとる」「やせる」など、「単純状態」を表わす「ている」と結合する動詞が多く見られるからである。この点の考察にはいたらなかった。これもまた今後の課題として残さざるを得ない。

1976年 9 月

註

- (1) 金田一春彦「日本語動詞のテンスとアスペクト」(1954) (『日本語動詞のアスペクト』麦書房, 1976 p. 37 )
- (2) 金田一春彦「時・態・相・および法」(『日本文法講座』1, 明治書院, 1957)
- (3) たとえば、西尾寅弥「テイルとテアル」(『講座現代語』6, 明治書院, 1964), 佐治圭三「よく使われる語の性格」(『日本語と日本語教育—語彙編—国語シリーズ別冊1』, 文化庁, 1972)
- (4) 国広哲弥「日英両語テンスについての一考察」(『構造的意味論』三省堂, 1967, pp. 52-53)
- (5) 国広哲弥, 前掲書, p. 53
- (6) 国広哲弥, 前掲書, p. 54
- (7) 国広哲弥, 前掲書, p. 47
- (8) 国広哲弥, 前掲書, p. 55
- (9) 吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(明治書院, 1971) pp. 520-522 に諸研究がまとめられている。
- (10) 藤井正「『動詞+ている』の意味」(『日本語動詞のアスペクト』所収)
- (11) 吉川武時「現代日本語動詞のアスペクトの研究」(『日本語動詞のアスペクト』所収)
- (12) 藤井正, 前掲書, pp. 107-110
- (13) 藤井正, 前掲書, p. 107
- (14) 吉川武時, 前掲書, p. 160
- (15) 吉川武時, 前掲書, p. 309

- (16) 藤井正, 前掲書, p.107
- (17) 高橋太郎「すがたともくろみ」(『日本語動詞のアスペクト』 pp.125-126)
- (18) 吉川武時, 前掲書, p.296
- (19) 吉川武時, 前掲書, p.309
- (20) 吉川武時, 前掲書, p.309
- (21) 吉川武時, 前掲書, p.308 に「『している』の形が動作・作用の結果の状態の意味をあらわすのは, 結果動詞である。」と述べられている。
- (22) 吉川武時, 前掲書, p.172
- (23) 吉川武時, 前掲書, p.172
- (24) 吉川武時, 前掲書, p.172
- (25) 'imperfective' 'perfective' については, 三上章氏の『現代語法序説』で209ページ以下に述べられている。本書では三上氏とは異なった解釈をこの二語に対して行なった。しかし, 「ある, いる, できる」など状態性の動詞が非完結(氏によると「非完成」)動詞であるという点については同意見である。それは, 「ある, いる」などの動詞が, その状態の在続する過程のどの時点をとり出しても, その動詞の持つ意味を充たしている(完結している)との考えからである。三上氏の指摘は, 動詞自体のアスペクトの意味のレベルのみでなく, テンスの perfect, imperfect のレベルとあわせて考察する際に有効と考えられる。
- (26) 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版, 1972. p.16
- (27) 吉川武時, 前掲書, p.183